

意見

聖土曜日の神秘

山 本 巍

宮本氏の論旨は、われわれが通常遂行する二種類の判断がともに“自己中心性”に縛られていること（二種類の隠蔽の罫）、その突破の切りがねが他者存在の *actus essendi* への志向であり、その究極に“他者の他者性”としての存在そのものを置き、そこから新しい展望を開くことにあろう。では“志向性の先端で啐啄同時に「存在の第一原因」にふれるとき」とはどのような時か。それは付帯的判断と本質判断のいずれの場合も同じ構造であるのだろうか。氏の分析は本質判断を巡っては詳細で間然とするところがないが、運動因から“第一存在因”への道筋も本質論からエネルギーへの突破のことである。しかし偶然性に曝されている付帯的判断の場合は分析されることが少ないのでよく分からない。そこで一つ質問、「これは F である」という付帯的判断は述語 F の値に大小、多少、貴賤、黒白、正不正、敵味方などを取るが、ここで付帯的述語づけの醸し出す“隠蔽の罫”から解放する機構は何であらうか。プラトンは「ある」は「ころ」がそれ自身でそれ自身を通して定立するとした (*Theaet.* 185e)。つまりは「わたし」が自分で立てるのである。そこには「わたし」の選別の性格がある。判断はただ述語付けによる言分け・事分けによる事実化だけでなく、「わたし」の生きること全体に直結しかねない（従って運命の）選別の可能性がある。従ってそこでは「この人は F である」という判断において「わたし」は言葉の影に隠れることができない。“他者の他者性”は運命脈絡で「わたし」を他者なる実在に出会わせるのであろうか。「この人は近い（隣人である）」とはその典型であらうか。「愛するものは神を知る」と聖書にある。しかり、神秘は脚下の近みにある。

「神は人間を必要としない」（キルケゴール）という。人間を救うことが神に何かをつけ加えるであらうか。神は変化せず。だから救いは神の無償の業である。従って救いの業に人間が関与することなどありえない。しかし神は絶対の超絶？人間はそれほど小さい？とすれば神の救いの業も小さい。しかし「小さい神」は自己矛盾か、「死んで」いる。稲垣氏が「恩寵のみ」の強調はかえって“救われるもの”としての

人間が、「神の救いの業」についての理解から排除されており、「救い」の意味が空洞化”するとされる時、こうしたことを思わざるをえない。そして氏が冒頭で“自然は自然であることを保ちつつ、超自然的秩序のうちに取りこまれ、そのことによって完成される”と根本の枠組みを示されると、自然が完成することは超自然も同時に完成することにならないのだろうかと思わざるをえない。それは *relatio rationis* と *relatio realis* の混同だと言われるかも知れない。しかし神はただ神であるのではなく、人間の神でもあるとすれば、人間と「共にある」神（イマヌエル）とすれば、神も人間と共に完成するのではないか。“キリストにおける神性と人間性との合一という神秘”に神秘の“原型”を氏が見られる所以もそこにあるのではないかと拝察する。

しかし“神の救いの業にふくまれる人間の固有の役割を確認することは……神の救いの業をまさしく「神の」業として、すなわち神秘として見ることを助ける”ということ以上になるのではないだろうか。人間は既に救われている（創造の源初に、とするか、イエスの十字架において、とするか、に違いはあるにしても）。その救いは人間であるわれわれ「について」(de nobis)である。その意味で救いは成就している。しかしそれはわれわれ「の」現実ではない。イエスの十字架の救いが事実であるとしてもわれわれの現実ではない。相変わらず悪と悲惨にわれわれの現実は満ちている。そして復活のイエスの傍らをわれわれは通りすぎてとんと気がつかない。われわれ「について」の救いを「わたし」の現実にする変換操作子が「わたし」の自由なる「同意」であるのだろうか。しかしそれはイエスを引き受け担う以外のことではなからうと思う。十字架は未完成の印しそのものだからである。